



Title	言語の扱い方を存在と経験と意味から再検討する : 機能しつつある志向性に注目して
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2022, 26, p. 31-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語の扱い方を存在と経験と意味から再検討する

—機能しつつある志向性に注目して—

西口 光一*

要旨

言語の上達には、言語活動従事に直截に関与する言語的リソースを養い備えるようになることが伴う。現象学では、一般に静態的なノエシス-ノエマ相関が論じられるが、フッサールの趣意に即した志向性分析では、むしろ絶えることなく意味契機を生み出し続ける機能しつつある志向性に注目して、意味を形成し、意味を作動させ、意味を変化させ続ける意識を捉えなければならずとフランクは主張している。意識の機能と世界内存在による世界経験とその要に生じることばをそのように考えると、これまでの言語教育では、二次的な意味に依存した言語学習が常態になっていたことが明らかになる。意味契機を充溢させて本来の意味を活性化させながら言語的リソースを有効に養い備える活動を教室にもたすことができるように教育を構想することは、言語教育を有効なものにするための必須の条件である。

【キーワード】言語的リソース、ことば、経験、機能しつつある志向性、対話

1 はじめに

言語教育の主要な目標は、ごく概略的に言うと、学習者が目標言語を上達させることである。筆者の当面の関心は日本語教育なので、ここでは目標言語を日本語として話を進める。

日本語が上達するということには、言語活動の従事において、自身が発信者の立場の場合に日本語の語や言い回しを動員したり、受信者の立場の場合に振り向けられたことばの中にある日本語の語や言い回しを足がかりとして発話を対話的に定位したりすることが、より一層できるようになることが伴う。つまり、日本語が上達するということには、言語活動に従事するための日本語という言語的リソースを養い備えるようになることが伴うのである。ここに言う言語活動に従事するとは、文字通り実際の言語活動に従事することであり、言語教育の教室でただ文を作ったり、提示された文を内的な翻訳的過程で理解することではない。また、言語的リソースとは、

客体として記憶された単語や文型・文法などの知識ではなく、言語活動従事の現場でのことばの生成と理解の作動に直截に関与しているがその作動のプロセスはほとんど自覚されない、いわば潜在的な知識である。未熟達の言語ユーザーの場合には、客体として記憶された単語や文型・文法などの知識が言語活動従事の補助的な部門として働くことはあるが、そのように働く知識はここに言う言語的リソースには該当しない。しかし、未熟達の言語ユーザーによる言語活動従事では言語的リソースが関わる主要な作動プロセスと客体的な言語知識が関わる補助部門の作動という2種類の作動はしばしば混交している。そして、そうした作動で関与している知識のほうも、言語的リソースなのか、客体的な言語知識なのか、分明的でないことが多い。しかしながら、このように言語に関する知識を言語的リソースと客体的な言語知識に分類しておくことは言語の習得と習得支援を考える上で重要である。

本稿の目的は、言語の意味を中心に探究を行い、

* 大阪大学国際教育交流センター教授

その作業で明らかになった言語の意味やことばをめぐる洞察を基盤にして、言語教育において言語をどのように扱うのが適切かを考えることである。本稿では、現象学の基軸的な視点である機能しつつある志向性に注目してそうした探究を行う。機能しつつある志向性については、晩年のフッサールの助手で高弟であるフィンクによるフッサール現象学のエッセンスを論じた論考（フィンク、1982）で重要点が論じられているので、本稿では同論考を主な参照先とする。

本稿の目的は上の通りであるが、実際の論述の順としては、最初に、現象学の視座に基づいて本稿の関心の方向で得られたことばや言語活動や経験などをめぐる見解を総括的に提示する。その後、そうした諸見解が得られた背景となっている現象学の視座を概略的に論じ、その視座の下に意味というテーマについて考察する。そして、最後に、そうした意味についての考察の上で、有効に言語的リソースを養い備えるために言語教育をどのように企画する必要があるかについて検討する。

ここで用語の解説をしておく。言語という用語では、本稿の関心の対象を一般的に指すものとする。ことばは、口頭での言語活動であれ書記での言語活動であれ、現実の言語活動を仲立ちしている言語を指す。それは、口頭での言語活動の場合は発話、書記の場合はテキストと呼ぶことになるが、いずれの場合でも、それらは客観的な言語的実体ではなく、行為として捉えられる。また、ことばには内的な言語も含まれる。一方、言葉は、ことばに観察的な目を向けたときに客体として姿を現す抽象化された言語ユニット、あるいは辞書や文法書で扱われている言語事項である。単語や文型などは言葉の事例となる。語や言い回しもことばに反省的な目を向けたときに姿を現す言語ユニットであるが、言葉とは異なり、抽象化されないで未だことばの中に留まっている状態のものとする。そのような語や言い回しを合わせて言葉遣いと呼ぶこともある。

2 言語とことばをめぐる見解

2-1 ことばの様態

現代の社会で生きることを営んでいるわたしたちの言語活動従事を考えると、そこで取り交わされることばは、十分に成熟した言語という意味でシンボ

ルとなっていると見ることができる。一般的に言って、言語活動従事で現れる言語の様態としては、ことばとなったコトやそこに含まれるモノが目の前に物理的に存在しない場合のほうが一次的あるいはデフォルト的で、コトやモノに関連する事態や物が目の前に物理的に存在する場合のほうが二次的あるいは副次的だと考えたほうが、わたしたちが取り交わしていることばの実態を反映しているということである。つまり、現代社会で生きるわたしたちが取り交わすことばは、目の前に物理的に存在する世界のインデックスとなるよりもむしろ、ことばの取り交わしで、それが行われる物理的な四囲とは直截に関与していない何らかの事柄を当事者間で疎通したり、当事者の活動をコーディネートしたりしていると見たほうが、言語や言語活動の現実を精確に捉えているだろう。

そのような形で、わたしたちにおける言語の作動やわたしたちがことばを取り交わすことは、わたしたちによるわたしたちの現実の構成に枢要な要因として関わっている。

2-2 対面的な言語的相互行為

対面的な言語的相互行為の状況を考えると、わたしたちはいつもすでに基本背景として自身が生きている広範な文化的世界を張り巡らせ、当該の活動の脈絡も構想して、そうした背景と脈絡の下に対話的な言語的相互行為に従事している。そうした状況でわたしたちは、対話的な出来事を進展させる指令として発話をし、対話相手はそれを承けて指令を適正に対話的に定位し応答を生成して応答の発話、つまり次の指令をする。

ここで「対話的に言語的相互行為に従事する」というのは、どちらかという、相互行為の表面で行われることばの取り交わしに注目して相互行為に言及する言い方で、「対話的な出来事（を進展させる）」というのは、ことばの取り交わしを相互行為の表面としながら相互行為の現場で当事者たちによって構想されて共有されていることの総体を言っている。また、「発話をし」という言い方は、発話ということだが、単に口から言語を発することではなく、相互行為に従事している身体全体で行われる行為であることを示し、「それを承けて」というのも、そうした身体全体で行われる行為としての発話を承けてという意味で述べられている。一方、「指令」というのは、

本稿で初めて使用する用語である。発話は表現ではなく行為だとしばしば言われるが、行為だと言うだけでは不十分だと思われる。言語を対話的に見るということを徹底するなら、発話は、何らかの内容(コト)と対話相手への何らかの働きかけを示すとともに、それが向けられた対話相手にそれに応答するという要請が含まれていると見なければならぬ。そのような趣旨で、「指令」という用語を用いている。

2-3 当事者の「経験」

本項では当事者の「経験」ということについて検討する。

ドラマを見ると、わたしたちは登場人物の発話である音声と登場人物の行動や行為や表情や口の動きなどを含めた映像の両方を視聴して登場人物において起こっている出来事の展開と登場人物間の相互行為で疎通されている経験や思考などを知るわけだが、何らかの理由で音声が中断しても、映像を足がかりとして出来事の展開はおおむね知ることができる。しかし、登場人物間の言語的相互行為で疎通されている経験や思考などを音声なしで知ることは困難である。しかしながら、音声の間もなく回復すると一挙にそこで疎通されている思考や経験などをその背後で進展している出来事とともに再現できるようになる。一方で、映像が中断したときは、聞こえてくる「ことば」¹⁾を足がかりとして疎通されている思考や経験などを知ることはできる。背景の音で登場人物が今どこにいて何をしているかも知ることができる場合もある。そして、映像が回復すると正常に戻って、シーンや進展している出来事や行為などと同期した形で登場人物間で疎通されている思考や経験などを再現できるようになる。このようにドラマを視聴する場合は、すべての足がかりは、画面とスピーカーを通して、継続的ではあるが一つの面として視聴者であるわたしたちに与えられる。それでも、視聴者であるわたしたちは、そこで起こっている出来事や行為などや登場人物間で疎通されている思考や経験などを知ることはできる。

では、実際の生きることの中のわたしたちの当事者としての「経験」というのはどのようなものだろう。実際の生きることの中でわたしたちは時々刻々何を「経験」しているのだろうか。実際に生きingことを営んでいる当事者である「わたし」の中心部と

見られる事項から検討を進める。

実際に生きることにおいては、「わたし」は「わたし」を取り巻く環境に物理空間的に包囲されている。また、「わたし」はどの瞬間においても、「わたし」がこれまで生きてきた時間(過去)と、「わたし」がこれから生きていく時間(未来)の接面におかれているという意味で、いわば常に時間に包囲されている。つまり、「わたし」は常に空間的にも時間的にも世界に包囲されている。これが実際に生きingことを営んでいる当事者がおかれている状況であり、ドラマの登場人物における「経験」を視聴者として知るところとは決定的に異なる点である。

そのような「わたし」は、「わたし」における思考や経験²⁾などを「経験」しているだろうか。また、「わたし」自身の心理を「経験」しているだろうか。心理や思考や経験などは間違いなく「わたし」に属している。生きingことを営んでいる「わたし」は、覚醒しているかぎり、途切れることなく心理や思考や経験などを「経験」していると見るのが妥当だろう。次に、「わたし」は「わたし」がしている行為や「わたし」と対面して接触し交わっている他者との間での相互行為や活動を「経験」しているだろうか。これらも「経験」していると見るのが妥当だろう。なぜなら、「わたし」は「わたし」の行為や「わたし」と他者との相互行為や活動を継続的に進展させているわけで、それらを「経験」していないと仮定すると、それらを継続的に進展させているという事実が説明できなくなる。つまり、それらを「経験」していないと仮定すると、事実性の土台が崩壊するのである。ちなみに、相互行為の場合を考えると、活動は相互行為に脈絡³⁾を提供し、相互行為は行為に脈絡を提供するという埋め込み構造を見出すことができる。

次に、前項で言及された活動の脈絡を「わたし」は「経験」しているだろうか。生きingことを営んでいる「わたし」は、今自分はどのような場所において、今がどのような種類の時間で、「わたし」及びその場にいる人たちは何者としてそこにいて、今何をしようとしているのかあるいは何をしているところなのかなどを、覚醒しているかぎり、相応に「経験」している。あるいは、「経験」と言うよりも認識して知っているという意味で識知していると言ったほうが妥当かもしれないが、いずれにせよ「経験」している。さらに、やはり前項で言及された、**文化的世界**はど

うだろう。ここに言う文化的世界とは、人間が関与する以前からそこにある自然的世界と対比されるもので、いわば**活動の脈絡の背景**及び、「わたし」が**生きることを営んでいる広範な世界全般**である。「わたし」はこうした文化的世界を通常は自覚していないが、識知して生きることを営んでいる。そして、識知しているということは、潜在的には間違いなく「経験」しているということである。活動の脈絡の背景やより広範な世界全般を「わたし」が識知していないとするならば、活動は当該の活動の脈絡から遊離したものとなり、「わたし」の振る舞いの全体が世界の現実性から分離したものとなる。

一方で、Jacoby and Ochs (1985) が現実の共構築の議論で挙げている10の事項の中のスタンス、アイデンティティ、イデオロギー、情意なども「わたし」が「経験」しているかして否かと問われれば、「経験」していると答えなければならない⁴⁾。しかし、それらは直截に「経験」していると言うよりもむしろ現下の「経験」に浸透しているということにおいて「経験」されていると見るのが適切だろう。また、「経験」されている心理や思考や経験などに関与しているコトやモノのさまざまな側面も「わたし」において「経験」されている。「わたし」は抽象化された事象や物を「経験」しているのではなく、多かれ少なかれ「わたし」の関心の下に「経験」の総体の一部としてコトやモノを「経験」している。

「わたし」が「経験」をしているとき、「わたし」は、心理や思考や経験などを卓立部とした「諸経験」の扇状の拡がりの要に在る。つまり、当事者において「わたし」は「諸経験」の拡がりの扇の要部にある心理や思考や経験として主に「経験」される。それ以外の「経験」は要部の「経験」にいわば蔽われており潜在的にのみそこにある。しかし、要部の「経験」にはそれ以外の「経験」が意味契機として浸透している。これが、ハイデガーの言う、世界内存在としての人間の在り様であり、**世界内存在**による自身の「経験」である。

2-4 「経験」の自覚

次に、こうした「経験」の自覚について検討しよう。

広範な世界の全体は、「わたし」が**生きていると信じているこの世界全般**である。「わたし」を中心として拡がる世界全般は、空間的にも時間的にも多種多様に拡がり、また融通無碍の広大さと極限までの微

細さがあり、そうした世界全般を一つのものとして捕捉することはできない。**活動の脈絡の背景**は、「わたし」が現在いる活動の脈絡の背後にある拡がりなので通常は自覚されないが、意識を働かせることでそのさまざまな側面を走査することはでき、それを自覚することもできる。**活動の脈絡**も何気なく活動を営んでいる場合は自覚していないが、特別な活動に従事する場合は、自覚に上るだろう。**活動や行為**なども同様である。**心理や思考や経験**などは現在進行中の卓立した意識で、それはいわば現在の「わたし」そのものであり、そのような意味で特別な位置を占める。そして、それが自覚に上るときは、それとして意識される。「経験」に浸透しているスタンスやアイデンティティやイデオロギーなども通常は自覚されることはないが、例えば、他者との相互行為において、現下のテーマについてのスタンスや、テーマとの根源的な関わり方や、テーマをめぐる根本の思想などで彼我の間でズレがあることがわかってきたときは、自他のスタンスやアイデンティティやイデオロギーなどの違いが自覚される。

ただし、世界内存在である「わたし」は常に「諸経験」の只中にあるので、「わたし」が「わたし」を自覚したときには、自覚された「わたし」はすでに過去の「わたし」となり、現在の「わたし」は過去の「わたし」をいわば引用的に意識化することとなる。

3 現象学における機能しつつある志向性

3-1 機能しつつある志向性

上で論じた「わたし」である心理や思考や経験などを要とした「諸経験」の扇状の拡がりを**世界経験**と呼ぶことにしよう。世界内存在である「わたし」は常に固有の世界経験の只中に在る。フッサール現象学の「事象そのものへ」というスローガンは、このような世界経験に環帰することを謳ったものである。

周知のように、フッサール現象学の重要な道具立てとして、**志向性** (intentionality) と**ノエシス-ノエマ** 相関がある。志向性とは、意識は必ず何かについての意識であり、何についてでもない意識はないということ、つまり意識は志向性を自身に内包しているということである。ノエシスとノエマはそれぞれ端的に言うと、**ノエシス**は経験の仕方であり、**ノエマ**は経験されているものである。そして、意識はノエシス-ノエマ相関として生じ、それがわたしたちの経

験となる。現象学では、一般に、**自己能与**（フィンク、1982, p.143）する**意識における意識としての経験**はこのような構造を持っているものとして措定される。ちなみに、前節の議論で時に用いた**意識**という用語は、**自覚**とほぼ同じ意味で用いている。本節以降ではむしろ、前節での「**経験**」と重なるものとして**意識**という用語を用いる。また、前節で「**経験**」としたものを、本節ではカギ括弧を取って単に**経験**と呼んでいる。

フィンクは、一般に志向性について論じられるときは、どちらかという**静的に捕捉されたノエシス-ノエマ**相関が論じられる傾向があると指摘する。そして、そうした**静的なノエシス-ノエマ**相関を**作用志向性**と呼ぶ。それに対し、現象学の志向性分析のために真に重要なのはむしろ、**絶えることなく志向的経験を生み出し続ける動的な志向性**であると指摘し、それを**機能しつつある志向性**と呼び、以下のように論じている。

志向性の本質に対するフッサールの決定的な根本洞察は、以下のような事柄である。すなわち、**一見してそのように単純な「～についての意識」**は、**単純化してゆく能作の結果である**ということ、それはまた**多くの意識の多様性がひとつのぎっしり内容のつまった (massiv) 「～についての意識」**へと合流されているということであり、この意識がそのなかに有効に働くさまざまな意味契機を蔽うということである。隠されたものななかで働きつつ、その成果のなかで蔽われてゆく、つまり意味によって充たされてしまう意識のありかたの、その蔽いをとることが志向性分析の課題なのである。この志向性分析の主題は、**機能しつつある志向性 (die fungierende Intentionalität)**であり、**生き生きと意味を形成し、意味を作動させ、意味を変化させてゆく意識の機能**なのである。

(フィンク、1982, p.166、傍点強調は原著)

「**単純化してゆく能作の結果である**」単純な「～についての意識」というのは**作用志向性**のことで、そうした意識は「**多くの意識の多様性がひとつのぎっしり内容のつまった (massiv) 『～についての意識』**へと合流されている」とフィンクは言っている。つまり**単純化していくという意識それ自体の働き**の結

果である**作用志向性**という一片の意識は、**生じ続ける多くの意識の多様性がぎっしり詰まった全体性**を有する**総体としての意識の生成の流れ**の中に位置していると言うのである。そして同時に、単純な「～についての意識」である**作用志向性**は「そのなかに有効に働くさまざまな意味契機を蔽う」。また、「**隠されたものななかで働きつつ**」というの**作用志向性**はその背後にあってそれを生み出したさまざまな意味契機を蔽い隠すという形で働いているということで、「**その成果のなかで蔽われてゆく**」というのは、現在の**作用志向性**はそれに続いて生み出されるさまざまな意味契機に「**蔽われてゆく**」ということである。このように、**単純な「～についての意識」**が立ち現れてはまた次の**単純な「～についての意識」**に取って代わられてしまう、**絶えることのない意味の充溢という意識のあり方のその蔽い**を取ることこそが**志向性分析の課題**になるとフィンクは論じている。そして、その帰結として、**志向性分析の主題**は、**機能しつつある志向性**であり、**生き生きと意味を形成し、意味を作動させ、意味を変化させてゆく意識の機能**なのであるとフィンクは主張している。

3-2 機能しつつある志向性と世界経験とことば

機能しつつある志向性は、わたしたちにおいて**世界経験を生み出し続ける**。すなわち、わたしたちにおいて**広範な文化的世界を張り巡らせ、活動の脈絡をつくり上げ、活動を構想し、行為や相互行為を作動させ、経験をさせ、その中で思考や心理を生じさせる**。このように、わたしたちにおける**世界経験**は、**機能しつつある志向性が絶えることなく生み出し続ける意味契機の総体**である。そうした**世界経験**はわたしたちにおいて**絶え間なく進展し変転する意識**として生じる。同時に、その意識は**さまざまなノエシス-ノエマ相関**という**意味契機の充溢**としてわたしたちにおいて**識知あるいは経験**される。そうした**意味契機の充溢**の卓立部で生じる、**世界経験の要部**である**心理や思考や経験**などは**比較的顕在化**されやすい。しかし、それ以外は**隠在的**で、通常は**絶えることのない意識の進展や変転**の中で**自覚**されることなく**隠在的なまま過ぎ去ってゆく**。

すでに明らかなようにここに言う**世界経験**は、「わたし」の外にある何か（一般に言う**客体**）を「わたし」（一般に言う**主体**）が見たり聞いたりしてその存在を知るのではなく、**内容と現れが一体**となって

現出するものであり、現出と同時に識知あるいは経験されるものである。また、広範で多種多様に及ぶ世界経験は各瞬間に確実に存在しながらも、それは心理や思考や経験などの部分にただ凝縮的に代表される。心理や思考や経験など以外の部分は、潜在的に識知されるにとどまる。そして、そうした世界経験の凝縮的な代表としてことば(内的なことば、あるいは外的なことば)が現れる。フィンクはそれを言説の根源性(フィンク, 1982, p.135)と呼んでいる。意識はことばとして現れるほかないということである⁵⁾。

こうした考察の結論として、世界内存在による生きることの営みの独自性は、さまざまな意味契機を生み出し続けることであり、その凝縮的な代表としてことばを生み出し続けることとなる。さらに、敢えて模式的に言うと、境界は見えないながらも常に一つの総体をなしている動態的な世界経験を構成している個々の意味契機は、作用志向性の1コマ、つまりノエシス-ノエマ関連のユニットとして生み出されるものと仮定することができる。それゆえ世界経験の凝縮的な代表であることばもノエシス-ノエマ関連のユニットあるいはその複合として生み出されると仮定できる。そうしたノエシス-ノエマ関連のユニットは、Hallが言うように、沈殿した歴史的な意味や心的態度をあらかじめ染み込ませて、わたしたちの言語活動従事の契機にやってきて(Hall, 1995, p.208)、わたしたちにおいて世界経験を可能にしてくれるのである。バフチンの言うことばのジャンルは、ことばの立ち現れに関与するノエシス-ノエマ関連のユニットを概念化したものだと見ることができる。また、ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論も、同じような発想で、生きることの形式(Lbensform)とそれに包まれて行われる発話を言語ゲームの行使として捉えようとしている。

生きることを営んでいる世界内存在による世界経験は、決して留まることがない。生きるということは、静かに穏やかにしていても、必ず活動し続けているからである。そうした世界経験のいわば卓立部は心理や思考や経験などとその現れのことばである。そして、それらは、立ち現れてはすぐに次に立ち現れる心理などとことばによって否応なく過去に追いやられてしまう。また、ことばという世界経験の凝縮的な代表部以外は、通常は蔽われたままに過ぎ去っていく。このように、「わたし」は決して現在に留まることなく、絶えることなく進展し変転し続け、

その「わたし」の現れであることばも立ち現れては新たなことばに入れ替わられてしまう。これが、世界経験に生きている「わたし」の姿である。

3-3 日常的な言語的相互行為で取り沙汰される意味

言語の習得と習得支援に関心をおく本稿としては、志向性分析にこれ以上立ち入る必要はない。むしろ、上のような現象学の視座の下で意味はどのように捉えられるかに関心に向けて以下議論を続ける。

まず日常生活でのことばつまり発話の例を検討しよう。初めて刺身をさくで購入するというケースで、一方は「さく」を知っているが一方は「さく」を知らないという場面である。

例1

- A1: 帰りに、マグロと鯛、さくで買ってきてくれる。
B1: うん? 「サク」って?
A2: えっ? 知らないの。お刺身、かたまりで。
B2: へー、そんなの売ってるんだ。

このやり取りでは、BはAが言った「さく(で)」の部分がわからなかったということになる。そして、相互行為を進展させるためにAは「かたまり(で)」と言い替えている。この部分は、例えば、「『さく』は切りやすい大きさにしたかたまり」でもよい。また、AとBがまさに対面している場合であれば、Aはジェスチャーを交えて「こんなかたまり(で)」と言ったであろう。いずれにせよ、発話のある部分が理解できないで応答できないということが発生すると、その問題部分が取り上げられ(B1)、その部分の言い替えが行われる(A2)。この例の場合は、「さく」の意味がわからなかったと言ってもよいが、むしろBは「さく」を知らなかったと言うべきだろう。もう、一つ、例を挙げよう。

例2

- C1: 来月末、印税、入るから、温泉でも行こうか。
D1: いいねえ。ところで、「インゼー」って何?
C2: 本を書いたら、売り上げの何パーセントかもらえるんだ。
D2: おー、いいねえ。

この例では、Dが「インゼー」が何らかの収入らしいことはわかっているらしいので、Cは「インゼー」が発生する経緯を説明している。そのことで、Dは「インゼー」がわかったということになる。この例ではCによる説明でDは「インゼー」の意味がわかったと言ってもよいが、やはり「印税」というものをDは知らなかったと言ったほうが適切かもしれない。

このように実際の生活において「意味がわからない」ということが発生すると、その問題部分が取り上げられ、言い替えや説明などの注釈でそれが解決されて、相互行為が続けられる。つまり、「意味がわからない」という問題が発生するのは自身に向けられた発話に回答できない場合であり、そのときに問題部分が時に焦点化され取り上げられる。そして、そうすることで、あたかもその取り上げられた部分の意味がわからないというふうに見えるのであり、しばしば「〇〇の意味がわからなかった」と言及されるのである。これが日常的な相互行為で取り交わされる発話における「意味がわからない」の現実である。

日常生活で営まれる言語的相互行為で取り交わされる発話は、対話者相互が識知できる世界経験をつくり上げることができるノエシス-ノエマ関連のユニットあるいはその組合せとして作り上げられる。つまり、日常的な言語的相互行為とは、そもそもそのような趣旨の下に運営される相互行為のことなのである。ゆえに、日常的な相互行為で相手が捕捉できないノエシス-ノエマ関連のユニットを行使するのは、本来の趣旨に反する。例1と例2ではAもCも各々、自身の発話は適正に識知されて相応に回答してもらえるものと考えてそれぞれの発話を行っているのであるが、予想に反して、それぞれ「サシ」や「インゼー」の部分で相手は経験世界に空隙ができてしまうのである。そのような場合に提供される注釈は、その綻びを繕おうとするものである。相手が識知できないノエシス-ノエマ関連のユニットがそうとわかっていて行使されるのは、新たな何かを学ぶ場合や教える場合など特殊な場合だけである。

一方で、ただ世間話をしているときに、唐突に例えば「子育ては大変だよー」などと言われると、その発話の文字通りの意味はわかるが、なぜその話の脈絡でそうした発話が「わたし」に向けて行われるのかわからない。つまり、受け手において発話の意味はわかるが、意図がわからないとなる。つまり、

発話が現下の相互行為での位置づけを失うのである。

こうした例は、日常的な言語的相互行為の場合をめぐって2つのことを示している。一つは、日常的な言語的相互行為では、言語あるいは言葉そのものの理解や意味が問題になることなく進行するのが通常の状態だということ。それゆえに、発話やその中の要素の意味は言うまでもなく、言語そのものがそもそも注目されないということである。日常的な相互行為では、人はただ言語的相互行為に従事するのである。そして、今一つは、言語あるいは言葉は、言語的相互行為が不全を来してその部分が綻びとなったときに、初めて焦点化され取り上げられて、その焦点部の意味が取り沙汰されるということである。

3-4 言語教育における意味

次に、言語教育の授業場面を考えてみよう。

例3 教師(T)は順次にイラストを見せながら、教科書の登場人物のりさんの話をしている。

T1: 授業は、4時10分に終わります。それから、りさんは図書館に行きます。

S1: おー、library。先生、「トショカン」は“library”?

T2: はい、そうですね。りさんは図書館に行きます。そして、少し勉強します。

S2: ああ、“she works at the library”。先生、「ベンキョーします」は“works”?

T3: そうですね。“she studies”です。りさんは、少し勉強します。

この例のやり取りでは「トショカン」と「ベンキョー」が焦点化されている。そして、Sは、それらを各々、自身の言語の言葉である“library”と“works”と並置してその意味を捉えようとしている。この例では、りさんの放課後の行動として話が進められているが、一般の日本語の授業では、ただ「図書館」や「勉強します」などを示すイラストを見せて、各々の語を単独で示すことも多い。そのような場合は、当初から単語が焦点化されて、取り立てて教えていることとなり、それはほぼ「あなたの既知の言語の言葉との対応でこの日本語の語の意味を知ってください」と要請していることになる。

このように言語教育においては、言語の抽象化された姿である言葉が取り立てて扱われ、その意味が

取り扱われることがいわば常態となっている。多くの言語教育者がそうした状況を学習と教育上の重要な課題と見てそれを改善しようと考えことさえないほど、それは常態として放置されている。

3-5 本来の意味と二次的な意味

2-2で、対話的な出来事とは、ことばの取り交わしを相互行為の表面としながら相互行為の現場で当事者たちによって構想されて共有されていることの総体だと言った。対話的出来事の現実とは、対話の当事者たちによって、言語の本源的な姿であることばを枢要な仲立ちとして構想された意味契機の総体という現実である。そして、そこではことばはシンボルとして機能している。

当事者が経験している現下の意味契機の総体は、基本的にはその直前の意味契機の延長線上に在る。そして、ことばは、本来現下の意味契機の総体の一部として在るのが通常の状態であり、その状況でこそことばは意味契機の総体を代表し内包する。そして、「わたし」において絶えることなく意味契機が生じことばが立ち現れるというのは、「わたし」が社会文化史的に生きる一人の当事者として生きているあるいは生きることを営んでいるということである。そのように考えるならば、ことばは社会文化史的に生きることの発露であり、生きることのその契機での「わたし」の生き方や姿勢を示していることとなる。ことばは、Holquistがバフチンの見方として言っているように、「人格の声、意識の声」(speaking personality, speaking consciousness, Holquist, 1981, p.434)である。そうしたことばの意味は、その契機での「わたし」の人格のあり様、あるいは「わたし」の意識のあり様なのである。「わたし」の現実は、そのように絶えることなく意味契機を生成し続ける当事者としての現実である。そして、「わたし」が対話相手に向けて行う発話もそうした意味契機の代表的な1コマとなっている。

一方、発話に向けられた対話相手におけることば＝発話の意味はどうなるだろう。発話は、「わたし」と対話相手の間に架けられた橋であり、話し手と聞き手とが共有する共通の領域である(バフチン, 1980, p.188)。発話に向けられた相手は、それを能動的で応答的に理解する。つまり、発話が自身に向けられた瞬間をきっかけとしてそれを適正に位置づけて次の自身の発話(応答)に向けて意味契機を生み出す。

このとき、自身に向けられた発話は、応答に向けた自身の意味契機の1コマとして解釈的に定位される。向けられた発話は、いわば消化されて応答の発話を生み出す糧となるのである。バフチンが「テーマを捉えうるのも、能動的な理解だけです。生成しているものを捉えうるのは、自らも生成しつつあるものだけです」(バフチン, 1980, p.226)と言っているのはそのような事情のことである。

ことばの意味も発話の意味も、一つの意味として画定することはできない。ことばの意味は、他者とともに生きる「わたし」における現下の意識であり、発話の意味は「わたし」に向けられた発話の「わたし」における能動的応答的理解の中の意味契機の1コマである。ことばは「わたし」の人間の生の発露である。「わたし」の人間の生に価値があるかぎり、ことばには意味がある。そして、バフチンが言うように、人間として生きることは対話的に生きることである(バフチン, 1988, p.261-262)。存在するということは対話的に接触交流することであり、対話が終わるとき、すべてが終わる(バフチン, 1995, p.528)。

4 本来の意味を活性化させる言語の学習と教育へ

人間的な生が生み出すこのような意味を本来の意味と呼ぶならば、言語教育において一般に注目され、取り扱われる意味は、いわば二次的な意味である。それは、注目され取り上げられた言語ユニットに対する画定された意味であり、一般的に、そうした意味の下での言語ユニットと意味のペアが学習者が知って記憶すべき対象となる。そして、言語教育において言語事項が取り立てられると、二次的な意味に依存して言語を学ぶことは避けがたいこととなる。

本稿の冒頭で論じたように、日本語が上達するということには、言語活動に従事するための日本語という言語的リソースを養い備えることが伴う。構造的アプローチ、つまり文型・文法事項や語彙などの言語事項を各ユニットの学習事項とする教育企画の下では、言語の学習は畢竟上で言ったような二次的な意味に依存した学習となる。それは、すでに明らかのように、言語を実際の言語活動従事の操作状況とは切り離して、ただ客体としての言語事項の知識のストックを形成しようとする方法である。そして、

そうした方法では、言語活動従事で補助的に働く知識が習得できるだけで、実際のことばの生成と理解に参与する言語的リソースを養い備えることはできない。

言語的リソースを養い備えるためには、**学習者が言語活動の当事者となって意味契機を充溢させながら言語活動に従事する経験**をしなければならない。そして、そのように言語活動に従事させて言語的リソースを計画的に養い備えるためには、**特定の種類の言葉遣いが自ずと集中するような言語活動のユニット**を工夫し、そうしたユニットの系列で日本語の上達が順調に進捗するように教育企画を策定する必要がある。

言語教育者は二次的な意味に依存した言語学習の問題性をもっと真剣に考えなければならない。単なる言語事項の理解と記憶に陥ってしまわないで、本来の意味を活性化させながら言語的リソースを有効に養い備える活動を教室にもたらすことができるように教育を構想することは、言語教育を有効なものにするための必須の条件である。

注

- 1) ここでは視聴者が耳にする言語は、当該の出来事に参与する当事者間で取り交わされることばではないので、カギ括弧付きの「ことば」としている。
- 2) ここに言う経験は、「わたし」が体験した出来事という意味に限定されたものである。
- 3) 言語的な前後関係を示唆する文脈を避けて、活動の前後や背後という意味で脈絡という用語を用いている。
- 4) Jacoby and Ochs は、共構築を「形式、解釈、スタンス、行為、活動、アイデンティティ、社会制度、技能、イデオロギー、情意、その他の文化的に意味のある現実を共同的に創造すること」(Jacoby and Ochs, 1985, p.171) と説明している。
- 5) 実際には、言語以外の記号やイメージとして現れる場合もあると言わねばならない。

参考文献

邦文

- ワイトゲンシュタイン, L.、藤本隆志訳 (1976) 『ワイトゲンシュタインシュタイン全集 8 哲学探究』大修館
- 木田元 (1970) 『現象学』岩波書店
- 木田元 (1984) 『メルロ＝ポンティの思想』岩波書店
- 木田元 (1991) 『現代の哲学』講談社
- 木田元 (1993) 『ハイデガーの思想』岩波書店

- 黒崎宏 (1997) 『言語ゲーム一元論—後期ワイトゲンシュタインの帰結』勁草書房
- 竹田青嗣 (2001) 『言語的思考へ—脱構築と現象学』径書房
- 西口光一 (2013) 『第二言語教育におけるバフチンの視点—第二言語教育学の基盤として』くろしお出版
- 西口光一 (2015) 『対話原理と第二言語の習得と教育—第二言語教育におけるバフチンのアプローチ』くろしお出版
- 西口光一 (2020) 『第二言語教育のためのことば学—人文・社会科学から読み解く対話論的な言語観』福村出版
- 西口光一編 (2020) 『思考と言語の実践活動へ—日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版
- 西口光一 (出版予定) 『メルロ＝ポンティの言語論のエッセンス—メルロ＝ポンティとオートポイエーシスと対話原理』福村出版
- ハイデッガー, M.、細谷貞雄訳 (1994) 『存在と時間 上』筑摩書房
- ハイデッガー, M.、細谷貞雄訳 (1994) 『存在と時間 下』筑摩書房
- バフチン, M.、北岡誠司訳 (1980) 『言語と文化の記号論—マルクス主義と言語の哲学—』新時代社
- バフチン, M.、佐々木寛訳 (1988) 「ことばのジャンル」『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン、新谷敬三郎他訳 (1988) 新時代社
- バフチン, M.、伊東一郎訳 (1988) 「ドストエフスキー論の改稿によせて」『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン著、新谷敬三郎他訳 新時代社
- バフチン, M.、望月哲男・鈴木淳一訳 (1995) 『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫
- フィンク, O.、新田義弘・小池稔訳 (1982) 「エトムント・フッサールの現象学の問題」『フッサールの現象学』以文社
- フッサール, E.、細谷恒夫・木田元訳 (1995) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社

英文

- Hall, J. K. (1995) (Re)creating our worlds with words: A sociocultural perspective of face-to-face interaction. *Applied Linguistics* 16: 206-232.
- Holquist, M. (1981) Glossary. In Holquist, M. (ed.), Emerson, C. and Holquist, M. (trans.) (1981) *The Dialogic Imagination*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Jacoby, S. and Ochs, E. (1995) Co-construction: an introduction. *Research on Language and Social Interaction* 28: 171-183.
- Maturana, H. and Varela, F. (1992) *The Tree of Knowledge: The Biological Roots of Human Understanding*. Boston and London: Shambhala. 管啓次郎訳 (1997) 『知恵の樹—生きている世界はどのように生まれるのか』筑摩書房